

〈特集〉カンボジア南西部ポーサット州農山漁村の変貌
——資源, コネクティビティ, 市場経済——

序

小林 知*

**An Interdisciplinary Study on the Transformation of Cambodian
Rural Society: Case Studies in Pursat Province**

Introduction

KOBAYASHI Satoru*

Abstract

This special issue analyzes specific changes in the lives of rural populations and communities in Pursat Province, southwest Cambodia, during about 30 years since the 1990s by bringing together multi-scale interdisciplinary case studies. The current Cambodian government, which came into existence as a democratic institution in 1993 with the support of the United Nations, has given priority to market principles. Thanks to integrating into the global economy, the country has enjoyed rapid and steady economic development for over three decades. However, the government has not distributed the fruits of action equally among the population. At the same time, the deterioration of natural resources in the country has accelerated.

Based on fieldwork conducted from 2011 to 2020, the five case studies in this special issue explore the transformation of living conditions and communities in Pursat Province from an interdisciplinary perspective. The first two case studies, a comparative analysis of rural livelihoods in lowland and upland areas and a comprehensive study of agricultural development, present a complete understanding of the changes. The third case study examines the impact of modern rice-growing activities recently introduced into the irrigated lowland villages. The fourth and fifth case studies reveal the transformation of the environment and local societies in the upland mountainous areas. Collectively, the case studies illustrate the three driving factors in the recent changes among rural communities in the province: the region's rich natural resources, the expansion of connectivity, and the penetration of the market economy.

* 京都大学東南アジア地域研究研究所 : Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
e-mail: kobasa@cseas.kyoto-u.ac.jp
DOI: 10.20495/tak.59.1_5

These three factors in rural Cambodian society's transformation are not new. However, by reading the five articles one can gain a deeper understanding of how these factors operate in Cambodia's rural communities in the twenty-first century and the ways in which they have changed people's lives. The articles serve to expand the knowledge of readers, who could include experts as well as the general public, seeking to understand the transformation of the world in terms of local reality. At the same time, this special issue demonstrates the value of interdisciplinary collaborative research by bringing together researchers of the humanities, social sciences, and natural sciences to study an area and its people's lives.

I 特集の趣旨

本特集は、カンボジア南西部のポーサット州の農山漁村の近年の変化を、複数の専門性とスケールに基づく分析を集めて総合的に考察する。東南アジア大陸部インドシナ半島の南部に位置するカンボジアには今日、1,500万人を超える人々が暮らす。西でタイ、北でラオス、東でベトナムと国境を接し、日本の約半分の面積であるその国土には、メコン川とトンレサップ川という二つの水系がある。その二つの川の合流点にある首都プノンペン、アンコールワット遺跡を擁する観光地シムリアップ、国内西部のバタンバン、国内東部のコンポンチャームなどには都市的な空間が近年拡大をみせている。しかし、農村居住者が全国人口に占める割合は、東南アジアの国々のなかでもまだ比較的高い。そして、そこで暮らす人々の生活は、1993年に国連による支援が制度的な枠組をつくって以来、基本的に外部の諸力を利用する形で復興と開発を進めてきた国家のもとにある。

本特集は、カンボジア農村に暮らす人々の生活の変化と、環境および社会の変容を考察することを目的に実施された学際的共同研究の成果の一部である。¹⁾ 1990年代のカンボジアの農村住民の生活は、内戦以前のそれと共通した特徴を示す伝統色が強いものだった [小林 2011a]。例えば稲作技術は、環境の特性を利用する農学的な適応がその中心であった。しかし2000年代以降、状況は急激に変化した [e.g. 小林 2011b]。再び稲作についていえば、化学肥料と高収量品種が使用されるようになり、売るための栽培が多くの地域でみられるようになった。

共同研究の参加者は、個々の専門性に基づく分析視点の相違を踏まえた上で、地域の総合的な理解を〈背景〉として研究を進めることを共通の了解事項としていた。そして、多様な特徴をもった農山漁村が比較的小さい地理的範囲に展開するカンボジアのポーサット州に2011年から2020年までの間複数回集まって、一緒に村々を訪問し、聞き取りの情報を共有し、

1) 共同研究は本来、20世紀初頭以降の長期的な環境と社会の変容も分析の対象としていた。ただし本特集では、1990年代から今日までの時間幅に分析の射程を絞って、住民の生活の変化と農村社会の変容を考察する。調査地としたポーサット州の19世紀末から20世紀初頭の地方社会の状況については、北川 [2021] を参照されたい。

その場で見出した事象に関して各々の立場から意見交換を行う共同のフィールドワークを実施した。本特集にはそのうち、文化人類学を方法とした地域研究、経済学、作物学、リモートセンシングを用いた土地利用分析、歴史を重視した環境社会学を専門とするメンバーが、それぞれの視点からみた対象地域の変容に関する分析を寄稿している。²⁾

1990年代から今日までの約30年間にカンボジアがおかれてきた状況は、紛争からの復興と、民主化および市場経済化を基本的な枠組みとして議論が可能である。国連の支援により1993年に誕生した新しい国家が、形の上では民主主義的な制度に基づく政府機構をつくり、また市場原理を優先する考えに基づく国際機関の支援政策を受け入れて開発を進めてきた状況については、政治経済学やポリティカル・エコロジーの視点から批判的な分析が提出されている。本特集は、それらの議論を背景としつつ、ポーサット州の農山漁村で暮らす住民の約30年間の生活の具体的な変化を分析し、その特徴を考察する。それが明らかにするのは、豊かな資源という地域の特性と、コネクティビティの拡張、市場経済化の浸透という駆動力である。その力自体は、世界諸地域で農村の変化を推進してきた普遍的なものであり、目新しくはない。しかしそれが、21世紀初頭のカンボジアの国と社会でいかに作用し、人々の生活をどのような形と経験の下で変えたのかという問題は、世界の変容を地域のリアリティのもとで理解しようとする専門家や一般市民の知見を拡張するものであり、地域研究として追求すべき学術的な意義がある。

II 先行研究

カンボジアの自然、社会、文化に関する学術的な研究は、フランス植民地時代に始まった。当時現地に赴任した行政官による研究には、今も参照すべき重要な作品が多くある。20世紀半ば以降には欧米の学者による研究が増え、また西欧式の教育を受けたカンボジア人知識人による自社会の研究も少数ながら現れた。しかし、その後1970年代から1990年代初頭まで、カンボジア国内の学術研究は断絶と停滞を余儀なくされた。言うまでもなく、その原因は、ポル・ポト政権による社会革命と、それ以降の国際的孤立にある。

1990年代半ば以降、現地フィールドワークに基づく研究活動がカンボジアで再開した [e.g. Hayashi 2005]。それ以後今日までの約30年間に数多くの研究者が現地を訪れ、調査を実施してきた。しかし、住民の日常生活や生業の実態を、その社会や文化の特徴を考慮した総合的な理解のもとで考察しようとする共同研究はごく少ない。アジア経済研究所の天川直子が実施し

2) 寄稿者のひとりの石橋弘之は、共同研究の当初のメンバーではなく、共同調査にも参加していない。しかし、この共同研究に先んじてポーサット州で調査を実施していたため、調査内容の検討を目的とした研究会に招き、議論に参加してもらった。

た1990年代から2000年代初頭のカンボジアに関する共同研究は、当時の社会の復興と再生の実態を知らせる重要な業績である〔天川 2001; 2004〕。そこでは、同国の歴史、政治、経済、そして農村に関する専門家が集まり、その国家と社会の当時の全体像を示そうとした。ほか、矢倉と小林も、2000年代初頭を中心に行った村落での調査に基づき、タケオ州とコンポントム州の農村社会に関する考察を示した〔矢倉 2008; 小林 2011a〕。

他にも多くの研究者が、カンボジアの村落社会、農業、家族生活、出稼ぎなどについて調査を行い、分析を発表している。しかし、その大半は、専門性を重視する学術活動の基本的な要件に沿った形で成果を公開しているため、各々が専門とする研究者コミュニティに向けて発信されている。同じ状況は、1990年代に再開したカンボジア本国の教育研究機関の動向においても顕著である。例えば、現地の有力シンクタンクである Cambodia Development Resource Institute は、変化を続けるカンボジア社会の最新の状況を積極的に調査し、その成果を1990年代から各種の報告書の形で公表している。貧困削減の政策立案のためのベースラインサーベイ、土地をめぐる所有や紛争の事例調査報告など、その出版物はカンボジア社会のクリティカルな問題を取り上げ、分析を加えるもので、揺れ動く現地社会に関してのいち早い報告として価値が高い。しかしそのほとんどは、主な読者と想定される開発専門家やドナー機関が慣れ親しんだ用語で現状を分析することに終始し、対象とする人々の日常生活の拡がりに関心を向けることが少ない。

カンボジアの教育研究機関の最高学府である王立プノンペン大学や王立農業大学の教員と大学院生の間にも、同様の姿勢がみとめられる。つまり、経済学、自然資源管理、環境科学、農業技術、食品加工、水産業、森林管理などの専門の時々の研究トレンドは意識されても、フィールド研究によって人々が暮らす地域の全体的な理解を進めることの重要性については関心が払われることが少ない。

他方で、外国人研究者が中心となり、近年のカンボジアの環境と社会の変容を考察する研究書が出版されている。³⁾ まず、Caroline Hughes と Kheang Un による編著〔Hughes and Un 2011〕は、政党政治、国際援助、農村への貨幣経済の浸透、土地登記事業、マイクロファイナンス、労働移動、地方分権化とグッドガバナンス、自然資源管理、市民社会組織、そして宗教などに関する15の論考を集めて、1990年代以降のカンボジア社会の変容を考察している。同書が全体として問うのは、四半世紀以上に及んだ紛争期の後につくられた政治的安定のなか、1990年代から2000年代半ばまで世界で最も高い成長率を示した経済発展が生みだした国家と社会の関係である。それは、フン・セン首相が主導する人民党が、ネオリベラリズムの立場に基づく

3) カンボジアで調査経験をもつ多様な専門家による38章の短文を集めて出版された『現代カンボジアのハンドブック』も、1990年代から2010年代にかけての同国の状況を理解するための必読文献である〔Brickell and Springer 2017〕。

近年の国際機関の開発支援を利用して、いかに権威主義体制の強化を達成したのかを明らかにし、2000年代以降のカンボジア社会を理解するために有益な情報と分析を提供する。⁴⁾

Hughes と Un が経済発展を中心に国家と社会の関係を論じたのに対して、Sarah Milne と Sango Mahanty が編集した論文集は、ポリティカル・エコロジーの視点から、カンボジアの自然環境と国家統治の関係性を分析する [Milne and Mahanty 2015]。長期の内戦と国際的孤立という過去により、1990年代末のカンボジアには、東南アジア大陸部の多くの場所では消失してしまった豊かな森林と野生動物の生息地が残っていた。しかしその空間は、和平以降たちまちに縮小した。ポスト紛争国における自然資源管理をめぐる理論的な問題、2000年代から国内各地で深刻化した土地紛争、中国の支援による水力エネルギー開発、コミュニティ林業の導入とその問題点などを論じる13の論考からなる同書は、自然資源の急速な消失というカンボジアで生じた現象の実態とその原因を、国内の政治と社会の関係性だけでなく、援助国や国際機関を含むグローバルな政治経済的秩序の領域に引き出し、読者に問題提起をした点で、前掲書と同様に高く評価できる。

1990年代以降のカンボジア社会の変容の実態を解明するという点で、本特集の関心は上述の2つの研究書と重なる。ただし、上述の2編の書籍における地域社会の動態の分析が、国家レベルでの制度変化に対する下からの対応に注目するのに対して、本特集は、市井の住民の日常生活の変化に目線を置く。開発政策の対象者や紛争の当事者として、また社会運動の関係者としてその存在が顕在化した人々を研究対象とする手法は、問題状況をつくっているグローバルなコネクションや国家による制度設計の問題点を考察するために有効である。ただし、対象とする人々の日常生活は断片的に描かれるにとどまることが多い。他方で、本特集は、深刻な紛争には現時点で巻き込まれていないという意味で普通の日々を過ごしている人々を対象にしている。そして、専門を異にする研究者が集まり、フィールドワークを共同で実施し、その知見をもとに個人とグループが提出した論考を通じて対象とする地域の全体像を描き出す。つまり、フィールドワークに基づく学際的な共同研究という視座と、地域というスケールで現地の情報を取りまとめ、分析するという研究方法に、先行研究と本特集の間の大きな相違がある。

ひとつの具体的な地域を設定し、専門が異なる研究者が一堂に会し、共同で調査と討議を行った成果をひとまとめにして公開する。本特集が依拠するこのような学際的な共同研究は、調査に関わった人数、資金、時間、そしてデータ共有の仕方と総合的な考察の成熟度などの諸々の点で遠く及ばないが、かつて京都大学・東南アジア研究センターの研究グループが東北タイのドンデーン村で実施した共同研究の枠組を踏襲しようとしたものである [福井 1988; 口

4) 1990年代末の人民党の支配体制の構築と国際援助との関係性については、Ear [2013], Springer [2015], Strangio [2014] も参照されたい。

羽 1990]。本特集は、いわばその簡略版をカンボジアで模索した近年のプロジェクトの成果の一部である。

III 共同研究の経緯

本特集が掲載する論文の著者らは、「変容するコネクティビティと生業からみたカンボジア農村社会の生存基盤に関する研究」(科学研究費補助金, 基盤B, 海外学術, 2015~17年度)の参加者である。このプロジェクトは、同国の農村で、個人が生きるために、あるいは地域社会が持続的に維持されるために必要な物質的・精神的諸条件を総合的に検討することを目的としていた。共同研究者の専門領域は、地域研究、農学、経済学、水産学、リモートセンシング、自然資源管理など多岐にわたっていたが、総合的な地域の理解を〈背景〉として個々の分析を行うことを共通の了解事項としていた。また、特に自然科学系と人文社会系に分かれ、異なった流儀の研究方法をもって集まった研究者が共同するための「旋回軸」(pivot) [口羽 1990: 11] として、農業生態の視点からみた調査地域内の地理的区分を採用した。

プロジェクトの調査地であるポーサット州は、カンボジアの国土の中央にあるトンレサップ湖の南岸に位置する。その南部には、カンボジアの最高峰に連なるカルダモン山脈が横たわっている。プロジェクトの関係者は、まず2011年9月に、トンレサップ湖からカルダモン山脈までの東西約90キロメートル、標高差約300メートルの比較的小さい同州の地理的範囲を共同で踏査し、その領域内に7つの農業生態ゾーンを設定した [Kono *et al.* 2017]。すなわち、湖水ゾーン、沿岸ゾーン、沿岸低地ゾーン、低地ゾーン、低地山地複合ゾーン、山地ゾーン、高地ゾーンである。プロジェクトでは、この地理的区分をそれ以降の共同研究者による調査の「旋回軸」として、一方で自然科学系の調査者が各地で農業生産の具体的な諸条件などを調査し、他方で人文社会系の調査者が集落の形成や経済生活などについて情報を収集し、分析するといった活動を行った。

アジアやアフリカ、中南米などの他の国や地域と同じく、ポーサット州の農村で暮らす人々は、複数の生業活動を同時に組み合わせて生活を立てている。その多様な生計手段の組み合わせが示す総体的な特徴は、第一に周囲の自然環境と社会インフラの条件に規定されている。実際、ポーサット州の農業生態ゾーンの間には、周囲の環境を利用する形で営まれてきた伝統的な生業活動や、村落社会の形成過程に明らかな差違がみられた。

共同研究の現地調査は、プロジェクトのカウンターパートであるカンボジアの教育研究機関の教員と学生に参加を積極的に呼び掛けて実施した。これは第一に、調査地に長期で滞在が可能な共同研究者が誰もいないという日本側の事情を踏まえた上での、調査方法の工夫であった。また、先方の機関がプロジェクトの参加者に、教育活動への貢献を期待していたことを考

慮しての判断でもあった。具体的には、2013年から2017年の間に、王立農業大学（農学）、王立プノンペン大学（開発学）、王立芸術大学（民族学）のカンボジア人の若手教員と学部生および修士課程院生をポーサット州の農村に招聘し、「持続的な生業研究のためのフィールドワーク」と題した調査実習ワークショップを5度にわたって開催した。調査実習では、毎回異なった調査地を選び、5日から一週間ほどの期間を共に過ごし、景観観察と土地利用、世帯経済、イネや他の農作物の生長、水産物のバリューチェーン、集落史など、日本人研究者が提案した各種の農村調査プログラムを参加者に実際に経験させ、データの収集と分析、成果発表の作法などを教授した。さらに、そうして参加した延べ90名ほどの学生のなかから、特にポーサット州の農山漁村で調査を行って学位を取得することを希望した15名を選び、学位論文の調査と執筆を日本人研究者が指導した。最終的には、学士論文2本、修士論文13本がそのようにして提出された。

ワークショップ形式の調査実習という以上の方法がプロジェクトの全体に対してどれほど有効であったのかは、今後検討する必要がある。ただしそれは、日本人参加者にとっても、自らと異なった専門性と経験をもつ研究者による調査方法を体験する興味深い機会であった。また、一週間程度とはいえ、同じ場所を共同で踏査し、様々な意見交換を行ったことで得られた知見は少なくない。さらに、カンボジア人学生の学位論文の指導は、ポーサット州の農山漁村に関する情報を多角的に収集する機会となり、現地に長期滞在できるメンバーがいらないというプロジェクトの弱点の一部を埋めることにも繋がった。

ワークショップにて学生らが収集した資料、カンボジア人学生の学位論文、日本人の共同研究者が個々に収集したデータの共有などを進め、ポーサット州農山漁村の変貌の全容を解明するという最終的な研究の目標に向けてはまだ道半ばである。本特集は、その中間の整理として、プロジェクトに参加した日本人の共同研究者の一部が論考をまとめ、公表するものである。

IV 各論考の概要

では、本特集が所収する論考の概要を掲載順に紹介する。まず、「生業からみた開発体制下のカンボジアの農村変容——ポーサット州での広域調査に基づく一考察——」（以下、第1論文）は、ポーサット州の農山漁村の近年の変容を俯瞰し、その特徴を考察する。第1論文が注目するのは、トンレサップ湖の湖水からその周辺の低地、そしてカルダモン山脈の山地に至る範囲に展開する農業生態環境の多様性である。そして、その農業生態ゾーンを跨いで設定した複数の調査村で世帯の質問票調査を実施し、その結果を用いて、住民が営む生業活動の特徴とその変化をポーサット州の全域を視野に入れたスケールで分析する。第1論文の記述と考察は、後に続く4本の論文の背景情報の提供という役割も果たす。

「カンボジア・ポーサット州における農業の変化とそのメカニズム——未利用資源の活用と外部からの資金調達——」（以下、第2論文）は、農業経済学の立場から、2000年代以降にポーサット州で観察された農業活動の発展の特徴を考察する。第2論文が検討の対象とする農業活動は、カンボジア国内では低地を中心に広くみられる伝統的生業である稲作と、近年山地で拡大をみせている商品畑作物の栽培である。第2論文の分析の特徴は、機械化といった作物の栽培方法に関する直接的な変化の実態だけでなく、それが必要とした資金がどのようにして農家世帯に調達されていたのか、生産された農産物の出荷に欠かせない道路の整備がどう進んだのかといった背景状況を広く含め、総合的な検証を行っている点にある。さらに、ベトナムのメコンデルタの稲作、タイ東北部のキャッサバ栽培の拡大過程とポーサット州の農業の展開過程を比較し、その特徴を農業発展の広い文脈に位置づけ、考察する。

「カンボジアにおける灌漑導入が稲作の栽培と生産性に与える影響——ポーサット州における隣接する地区の比較に基づく検討——」（以下、第3論文）は、ポーサット州の低地部にあるバカーン郡の水稲耕作を取り上げ、市場向け品種の栽培の浸透とその生産性の実態を考察する。稲作は、カンボジア農村の住民の生活を支えてきた伝統的生業である。内戦や国際的孤立の期間も人々はそれに依拠して生活してきた。バカーン郡では、灌漑水路の整備を受け、雨季に「香り米」を、乾季は早稲の高収量品種を栽培する二期作が2010年代に始まった。第3論文は、灌漑地区内と地区外の水田地域に圃場を設定し、2013～15年に実施した実地調査に基づき、灌漑の整備が生産性にどのような影響を与えたのかといった稲作に関わる変化の諸側面を検証する。その考察は、コメの販路の拡大といった外的状況や、新しい栽培方法の導入による調査地の自然環境の変化にも及んでいる。

「21世紀の開拓移住によるカンボジア南西部山地の変容——移住者による農地拡大過程に関するリモートセンシング分析——」（以下、第4論文）は、現地での聞き取りで得た情報とリモートセンシング分析を合わせて、ポーサット州ヴィアルヴェーン郡の山地で1990年代以降に進行した開拓移住と農地拡大の過程を考察する。ポーサット州の南部をつくるカルダモン山脈の西部には、小規模の盆地と溪谷がつくる高原状の地形を特徴とする高地が広がっている。西方でタイと接するその山地は、1990年代末までクメールルージュ（ポル・ポト派）の勢力下にあり、人家も希な状況だった。しかし、治安が回復し、インフラの整備が進むと、低地から大量の移住者を迎えた。初期の移住者は自給自足的な生業を中心としたが、瞬く間にキャッサバやトウモロコシなどの商品作物の栽培が広がった。第4論文は、現地での聞き取り調査とリモートセンシングの分析を方法として、その地域への近年の移住者がどのような判断のもとに移住先を選択し、いかにして農地を拡大させてきたのかという過程を分析する。またそれを20世紀の東北タイでみられた開拓移住と農地拡大の特徴と比較し、環境変化と人間活動の長期的な関わりの文脈に位置づける。

第4論文が、内戦前と直接のつながりを欠いた山地の地域社会を取り上げたのに対し、「カンボジア西部カルダモン産地の地域史にみる『禁忌の森』の伐採と焼畑休閑地の権利」（以下、第5論文）は、ポーサット州の山地のなかでも、カルダモンの採集が内戦以前からみられ、紛争終結後は内戦以前の状況を知る先住民が引き続き居住しているエリアの人間活動と自然環境の関係性を、住民による農地取得過程を切り口に考察する。それによると、ポーサット州からその南のコクコン州へと広がったカルダモンの産地では2000年代に、内戦以前からの居住者に内戦後の低地からの新たな移住者が加わり、一緒に暮らす状況が生まれていた。第5論文は、水稻、陸稲、カルダモン、その他の商品畑作物の栽培地を区別し、また旧来の居住者と移住者の間の土地をめぐる認識や関係性の違いなどに留意し、住民と環境との関係性の変化を丹念に読み解く。

V 3つの特徴

本特集は、ひとつの地域を設定し、そこにみられる住民生活の変化と環境および社会の変容の全体像を考察しようとする点に最大の特徴がある。よって、序論の最後に、所収した5本の論考が相互に関係し合いながら示すポーサット州農山漁村の近年の変容の全体的な特徴をまとめ、紹介しておきたい。管見によれば、5本の論考を通読することで、読者はそこに3つの特徴を見出すことができる。

第1の特徴は、1990年代から今日までのカンボジア農村ひいてはカンボジア社会全体の発展は、各種の資源を食い潰す形で進み、そのポテンシャルに支えられてきたという事実である。1990年代以降のカンボジアの経済発展は、一人あたりGDPの伸びといったマクロ指標を中心に、縫製工場などの軽工業の展開や、観光業の振興などに支えられてきたと説明されることが多い。農業についても、例えばコメやその他の作物の輸出量の増加といった指標が、経済発展を知らせる根拠として扱われてきた。他方で、森林や土地などの資源が政治権力者の私腹を肥やす形で大規模に収奪されている状況が、ポリティカル・エコロジーの論者によって指摘されてきた。本特集の5本の論文は、生活向上を模索する市井の人々が選択し、行ってきた自発的な行動とそれが示す結果を追うもので、国家権力の資源収奪と関わる紛争を取り上げることはない。しかし、それが最終的に示す状況は、ポリティカル・エコロジーの論者が行う批判にも通じる、従来型の開発と発展の行き詰まりという近い将来の予想である。

例えば、ポーサット州の山地で進む農地開拓である。第1論文が住民の生業の視点から、第4論文がリモートセンシングによる観測を方法として跡付けるように、ポーサット州の山地は1990年代から最近まで、低地出身の貧しい農民の救済地としての役割を果たしてきた。また、低地から移住した人々が木を伐採し、焼き払って拓いた土地は、肥料分に恵まれた土壌を特徴

としており、施肥なしでも豊かな収穫を約束していた。しかし、肥沃度という地域の自然環境に蓄えられてきた特性は、商品作物栽培が繰り返されるなかで失われ、近年は化学肥料を投入しての栽培が一般的になった。類似の環境の劣化はトンレサップ湖においても明らかである。そこでは多くの住民が、魚が減ったことを理由に、伝統的な生業としての漁業を諦め、家族のメンバーを出稼ぎに送り出すようになった。

すなわち、ポーサット州の農山漁村の近年の発展は、1970年代に始まり1990年代まで続いた紛争という状況によって先送りにされた自然資源のボーナスの消費という形で進んできた。その状況は、農業技術の進歩なしに農業生産が増加する現象を理解するためのロジックとして、あるいはそれを敷衍して途上国の輸出作物栽培の発展メカニズムを考える視点として第2論文が紹介する「余剰のはけ口理論」を想起させる。しかし、その余剰は既に尽きかけている。以上の論点は、現代のカンボジアの国と社会を考える視点として、今後よりマクロな社会科学的な知見と統合して鍛えてゆく必要がある。しかし、カンボジアの今後の発展が別の推進力を必要としているという事実は、本特集の論考が説得力のある形で浮かび上がらせている。

本特集の論考が全体として明らかにする第2の特徴は、グローバル化時代の農村変容の基盤において、コネクティビティの拡張が大きな役割を果たしている事実である。冷戦構造の下で国際的に孤立していた時代のカンボジア農村であっても、住民の生活の場は外部に開かれていた。しかし、1990年代になって国境が開かれ、インフラの整備が進められる過程で、それまである程度の地理的範囲でほぼ充足していた住民の生活が一気にグローバルなコネクションと連結された。ある生活の場が外部と繋がる局面で、内と外の社会的性質に相違が大きく、また不均等な権力の配置の下でそれが生じる場合は、「摩擦」ともいうべき文化と権力の再配置が生じる [Tsing 2005]。一方で、近年のポーサット州における生業技術の変化、就労の機会を求めての人の移動や、新しい農作物の導入などの地域の動態は、「摩擦」と形容するほどの葛藤はみせていない。

事実として、ポーサット州から外部へ、外部からポーサット州へと向かうヒト、モノ、カネの双方向的な動きはこの30年間一貫して拡大してきた。そのなかでは、ひとりひとりの住民こそが外部とのコネクティビティの拡張を望み、そのチャンスを積極的に模索してきたように映る。ポーサット州の稲作や畑作は1990年代以降、それ以前よりも格段と強く、複雑な様子で国外の市場と結びつき、その影響下で行われるようになった。さらに印象的な例は、道路整備によって低地と結ばれたポーサット州の山地に、生活の糧とする農地を求め、1990年代以降に流入していった多数の低地人口が示していた社会動態である。また、その状況を生みだした道路整備が、中国からの資金と技術の援助下で行われたという事実も、今日の東南アジア農村の変容をつくるグローバルなコネクションを考える上で興味深い。

人々の生活をつくるコネクティビティの多重性と双方向性は、グローバル化時代の地域生活

を考える上の普遍的な枠組である。それだけを取り上げて直ちに、ポーサット州の農山漁村が示す個別的な特徴とは言い難い。しかし、例えば首都プノンペンの縫製工場、作物の輸出を通じたタイやベトナムの市場といった外部の空間、または出稼ぎ先としての韓国やタイからの仕送りといった具体的な関係性の文脈で、それが21世紀の初頭という時期に、カンボジアの農村部の低地と山地でいかに進行したのかという事実を取り上げ、分析する本特集の論考は、同時代的な東南アジア農村の世界をより広く、具体的な形で理解する視座を提供する。さらに、1990年代初頭まで国際的に孤立した環境にあったというカンボジア農村の過去の状況を考えると、外部者が特にその近くまで歩み寄り、そこに暮らす住民の日常生活の風景にいままに生じた変化としてそのインパクトの実態を分析する意義は大きい。他地域では常態となって久しいその変化は、まさに近年、カンボジアの農村生活の重要な一部になったのである。

本特集の論考が明らかにする第3の特徴は、ポーサット州の農山漁村に生きる住民の生活においては、市場経済の原理が「素」のまま働いているようにみえる点である。すなわち、世帯の生業戦略をみても、稲作や漁業の近年の動向をみても、開拓移住による農地の拡大過程をみても、変容の主体は個々の農民であり、国家の役割が非常に小さい。カンボジアの1993年以降の国内経済の立て直しが、援助国や国際機関からの援助と、外国資本による投資に依存したものであったことは広く知られている。政治経済学の視点から議論があるように、ポスト紛争国としてのカンボジアの支援に関わった諸外国や国際機関は、市場の力に多くを任せることを理論的な立場としていた。国家は、インフラの整備などを通して、農村生活の変化の基礎的な条件をつくった。しかし、第2論文が指摘するように、今日のカンボジアの農家世帯が行う農業活動には補助金などの支援が政府から充てられていない。品種選択や施肥に関する技術指導は、州の農業局によって一部行われている。しかし、農家世帯の作物栽培に大きな影響を与えるものとは思われない。

本特集の論文は直接扱っていないが、ポーサット州の農山漁村の住民の生業のなかで、国家政策の影響を直接的な形でみせているのは、トンレサープ湖の漁業である。カンボジアには、フランス植民地期に起源をもつ漁業区画システムに基づく資源管理制度があった。しかしそれが2000年代に解体され、2012年には漁業コミュニティに基づく新しい制度に移行した。それは小規模漁業者に一時的な利益を生みだした反面、資源の保全という長期的な課題に対してはマイナスに働いている [e.g. 佐藤 2019: 第6章]。資源の利用を、国家による介入なしに社会に任せるという特徴は、山地の農地拡大の様子にも重なる。そこには、長期的な視点で開発と発展を調整するという国家の役割がほとんど働いていない。既に述べたように、近年のカンボジアでは国家権力による森林資源の収奪や、アグロビジネスを志向する政商による土地の囲い込みが多く土地紛争を引き起こしている。福祉的な関心を欠き、市場経済的な原理を前面に押し出すカンボジアの国家は、その不確実性と影響力を認識しながら、農村の世帯および社会の

将来を市場に任せている。

市場経済の原理が「素」のまま作用するようにみえるという特徴はまた、社会に埋め込まれた形で存在し、作用する伝統的な経済や文化という側面が弱いという調査地の状況を反映するものでもある。カンボジア国内の東部、ベトナムと国境を接する山地部に住む先住民族の間には、1990年代以降、低地のクメール人の移住と市場経済化が進展するなかで文化伝統やコミュニティの見直しが生じ、多くの研究者の関心を集めた [e.g. Padwe 2020]。しかし、ポーサット州の山地に居住した先住民族は、1970年代半ばに故郷を追われ、1990年代後半まで希望しても戻れない状況が続いた。また、その多くは内戦前に低地のクメール人の言語や宗教文化を受容していた。詳しい分析は今後の課題であるが、事実として、それらの人々は内戦以降の生活のなかで集団的な行動を起し上がらせるに至らなかった。1990年代初頭に居住を始めたクメールルージュの元兵士らを开拓者とする地域社会が、過去との連続性を欠いた状態でポーサット州の山地に形成されたのは、その結果でもある。

ここでは詳しく述べないが、ポーサット州の低地においては、文化伝統を捉え直し、住民同士の連帯を新しい形で生み出すことで生活の脆弱性に対処しようとする動きもみられる [小林 2019; Kobayashi 2020]。微かではあっても存在するそのような住民による新しい挑戦が、市場の原理が「素」のまま作用するようにみえる状況下でどのように展開するのかは、興味深い今後の研究課題である。

VI 今後に向けて

本特集が全体として示すのは、専門を異にする複数の調査者が、経験的な調査方法に基づき、協力して描き出した現代カンボジア農村の変容の現実である。個々の論考は独立して読むことができるが、同時に、それぞれが相互の知見を補完し合う関係にある。本特集の5本の論考がそのようにして浮かび上がらせたポーサット州の農山漁村の変貌の3つの特徴については、今後、カンボジアの政治や経済を研究する社会学者らと、さらにまた市場経済化がほぼ同時期に進展したアジアの他国の専門家と意見交換する機会をもつことで、21世紀の東南アジア地域の農村生活を方向付ける諸力学に関するより総合的な研究として発展させてゆく予定である。その作業が進展した折には、改めて共同研究の内容を公表し、ご批判をいただきたい。

共同研究のメンバーからはまた、トンレサープ湖の漁業と資源管理の問題、世帯内の労働力の配置や生業戦略、畑作の技術と実践、山地フロンティアにおける土地利用のマイクロ分析など、今回は取り上げられなかった課題に関する分析が、これから順次公表されてゆく予定である。

小林：序

謝 辞

本特集は、科研費（15H05114, 19H00559）の助成を受けてカンボジアで実施した現地調査に基づく。現地での調査活動は、王立プノンペン大学、王立農業大学、王立芸術大学の教員・学生の皆さんにご協力をいただいて実施した。個別のお名前は挙げないが、ここに記して特に感謝を申し上げたい。掲載にあたってコメントをいただいた匿名の査読者、および編集作業に多大な労をとっていただいた『東南アジア研究』編集室の皆様にも感謝を申し上げる。本特集の出版はまた、京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「東南アジア研究の国際共同研究拠点」（2019-20年度）からも助成を受けた。

参 照 文 献

- 天川直子（編）. 2001. 『カンボジアの復興・開発』千葉：アジア経済研究所。
———（編）. 2004. 『カンボジア新時代』千葉：アジア経済研究所。
- Brickell, Katherine; and Springer, Simon, eds. 2017. *The Handbook of Contemporary Cambodia*. London and New York: Routledge.
- Ear, Sophal. 2013. *Aid Dependence in Cambodia: How Foreign Assistance Undermines Democracy*. New York: Columbia University Press.
- 福井捷朗. 1988. 『ドンデーン村——東北タイの農業生態』東京：創文社。
- Hayashi, Yukio. 2005. Introduction: New Japanese Scholarship in Cambodian Studies (Special Issue). *Southeast Asian Studies* 42(4): 387-393.
- Hughes, Caroline; and Un, Kheang, eds. 2011. *Cambodia's Economic Transformation*. Copenhagen: NIAS Press.
- 北川香子. 2021. 「ポーサット（カンボジア）をめぐる歴史地理的環境」『学習院女子大学紀要』23: 41-58.
- 小林 知. 2011a. 『カンボジア村落世界の再生』京都：京都大学学術出版会。
———（編）. 2011b. 『市場経済化以後のカンボジア——経済活動の多面的な展開をめぐる』Kyoto Working Papers on Area Studies No. 115, G-COE Series 113. 京都：京都大学東南アジア研究所. 84頁。
———. 2019. 「サンガハの可能性と限界——カンボジア農村における萌芽的なケアに関する一考察」『東南アジアにおけるケアの潜在力——生のつながりの実践』速水洋子（編著）, 503-538 ページ所収. 京都：京都大学学術出版会。
- Kobayashi, Satoru. 2020. Cultural Innovation in the Face of Modernization: A Study of Emerging Community-based Care in Rural Cambodia. *South East Asia Research* 28(3): 231-247. DOI: 10.1080/0967828X.2020.1816490.
- Kono, Yasuyuki et al. 2017. Interim Survey Report on Livelihood Transition Studies in Pursat Province, Cambodia. *Journal of Agroforestry and Environment* 11(1-2): 21-24.
- 口羽益生（編）. 1990. 『ドンデーン村の伝統構造とその変容』東京：創文社。
- Milne, Sarah; and Mahanty, Sango, eds. 2015. *Conservation and Development in Cambodia: Exploring Frontiers of Change in Nature, State and Society*. London and New York: Routledge.
- Padwe, Jonathan. 2020. *Disturbed Forests, Fragmented Memories: Jarai and Other Lives in the Cambodian Highlands*. Seattle: University of Washington Press.
- 佐藤 仁. 2019. 『反転する環境国家——「持続可能性」の罫をこえて』名古屋：名古屋大学出版会。
- Springer, Simon. 2015. *Violent Neoliberalism: Development, Discourse, and Dispossession in Cambodia*. New York: Palgrave Macmillan.
- Strangio, Sebastian. 2014. *Hun Sen's Cambodia*. New Haven: Yale University Press.
- Tsing, Anna. 2005. *Friction: An Ethnography of Global Connection*. Princeton: Princeton University Press.
- 矢倉研二郎. 2008. 『カンボジア農村の貧困と格差拡大』京都：昭和堂。

（2021年5月12日 掲載決定）